

2024（令和6）年度 久留米大学外部評価報告書

1. 総 評

21 世紀に入って 25 年が過ぎ去ったが、四半世紀が終わった一つの節目として、これまでの貴学の高等教育の本質をここで回顧することが提案された。

平成 17（2005）年 1 月 28 日付の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」において、「21 世紀型市民は、幅広い教養を身に付けて、高い公共性と倫理性を持ちながら時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、そして社会を改善していくような能力、資質を持った人材」とし、最後に、早急に取り組むべき重点施策として「12 の提言」が答申された。これは、「18 歳人口が減少して約 120 万人規模で推移する一方で、大学・学部等の設置に関する抑制方針が基本的に撤廃されたこと等により、「進学率」の指標としての有用性は減少し、主として 18 歳人口の増減に依拠した高等教育施策の手法はその使命を終え、「高等教育計画の策定と各種規制」の時代から「将来像の提示と政策誘導」の時代へと移行する。（原文）」という認識を踏まえたものであった。12 の提言をここに紹介する。

① 高等教育の量的変化の動向についての関連施策

- 人材養成に関する社会のニーズへの対応
- 各高等教育機関の経営の改善

② 高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化についての関連施策

- 入学者選抜・教育課程の改善、「出口管理」の強化
- 留学生交流の促進・充実

③ 高等教育の質の保証についての関連施策

- 大学等の設置認可や認証評価等における審査内容や視点の明確化

④ 各高等教育機関の在り方についての関連施策

- 教養教育や専門教育等の総合的な充実
- 大学院教育の実質化
- 世界トップクラスの大学院の形成
- 助教授・助手の位置付けを含めた教員組織の活性化

⑤ 高等教育の発展を目指した社会の役割についての関連施策

- 高等教育への支援の拡充
- 多元的できめ細やかなファンディング・システムの構築
- 学生支援の充実・体系化

振り返れば、本外部評価委員会が設置以降から現在までの間においても、上記の提言に沿った文部科学省の施策が思い浮かぶ。

そこで今年度の外部評価委員会は、「IR と人間力の育成」をテーマに開催された。貴学は基本理念に「人間性豊かな実践的人材の育成」を明確に掲げ、人間力を「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義している。これらの理念の上で文系学部、医学部のそれぞれで「人間力」の育成に努められている。全学の共通教育においては、学士課程で修得すべき 5 つの基礎力と、加えて共通教育で養う 4 つの力を明確に規定して、カリキュラムの中で各科目の目的と関連性を

明確に示して総合力としての人間力の育成を行なっている。学生の意識調査では、概ね学年進級とともに学修の達成度が高まり卒業につながっていることがすでに示され、さらに就職先企業のアンケート調査でも貴学卒業生の人間力が高く評価されていることが明らかにされている。IR の活用が始まったばかりではあるが、その成果も出始めており、今後さらに発展して時代に沿った人間力育成の強化に向けた教育改善が進むことが期待される。

さて、学修成果を可視化・挙証し改善へと繋げるための IR 活動は、教育の質保証という観点からも各大学にとって時流の課題である。また人間力育成は、大学そもそもの教育活動について振り返り検討するうえで普遍的な話題である。このふたつを同時に検討しようとしたことは、外部評価委員会としてチャレンジングなテーマ設定だったといえよう。ともすれば、データをもって詳らかに調べる IR 活動はミクロ的な視点へ陥りがちであり、人間力育成を語る教育活動はマクロ的な放談となりがちだからである。

しかしながら委員会当日は、貴学において構想あるいは実施している IR、学修成果可視化の実際が紹介されながら、一方で、そもそも大学として学生をどのような姿へと成長させたいのか（人間力）といった考えも披露され、両サイドの往還が見られた。手段である IR を目的化せずに、何のために IR 活動があるかの捉え直しと、貴学における教育活動の再認識が図られたのであれば幸いである。

参考までにいくつかの資料を挙げておきたい。ひとつは、政府系のものである。内閣府に置かれた「人間力戦略研究会」の報告書『人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～』は、平成 15（2003）年の発表である（以下 URL）。

<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>

また文部科学省資料で検索すると、「これまで提言された様々な資質・能力について（イメージ案）」として、第 9 回教育振興基本計画部会（資料 6）が、人間力を含め様々な提起を整理しており、こちらは平成 23（2011）年のものである（以下 URL）。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/12/18/1329013_02.pdf

こうした資料も参考にしつつ、貴学における考え方について再整理されることが期待されるところである。加えて、それを社会に向け発信していくデータの持ち方についても継続検討していくことが望まれる。

2. 評価できる点

貴学では、従来から内部質保証の推進組織として「教学マネジメント会議」を設置し、IR 活動を整理することで学修成果の可視化、学内におけるアセスメント全体を把握している。今後も、提示されたアセスメント・カレンダーにおいては、内容を精査しアップデートが図られていくことが期待できる。そこで、IR を活用したデータ駆動型教育による人間力の育成については積極的に取り組まれているが、カリキュラムで人間力育成の要素を特定して定量的データと定性的データに分類した上で、測定とそれらを組み合わせた分析の構築への取り組みが進められ、既に測定とデータ化まで到達できている。そこから学生の能力を可視化して IR を通じて教育効果を評価する仕組みの構築が現在進められ、個々の

学生の学修効果や様々な活動を記録して評価するための学生ポートフォリオも、既に医学部看護学科では導入されて活用が始まっている。他学科でも導入の準備が進められており、学生一人ひとりが自らディプロマポリシーへの達成度を評価して、そこから明確となる自己課題を解決する取り組みが広がることが期待できる。その中で「人間力」も学生自身で育成する仕組みへと発展することが期待され、さらに医学部では専門医として必要な能力として、医療と研究の双方を追求する人間力の育成に注力している。臨床医としての能力を動的能力と静的能力の相乗効果と位置付けて、キャリアと共に主体となる能力の変化をデータとして捉えて、在学期間の専門教育に限定せずに卒業後も含めた臨床医としての長いスパンにわたる能力育成に向けた検討を進めていることは注目に値する。当日配付された補足資料 1～9 を概観すると、各教育課程・各所に置いて、「人間力」や「学位プロフィール」「DP」の規定や調査、また入試やキャリアまでを含んだ調査結果の取りまとめなど様々に試みられていることについて評価できる。観点も、事後検証や仮説形成といった幅広いものであり興味深い。IR 活動によって、可観測性の高いものは把握・検証が始まっているといえよう。

とはいえ様々な資料があるということは、残念ながら散発的であることでもあり、結果としてまとめればどうなっているのかについて示すには、更なる創意工夫が求められるであろう。大学には情報公開が義務づけられているところである。こうした資料を地域社会や次代の久留米大生（高校生など）に対して、どのように示し、伝えていくのかについて検討の余地はあるだろう。学修成果を基礎に、久留米大学の教育成果を発信していく議論が待たれる。

3. 改善すべき点（今後の検討課題等を含む）

貴学では、人間力を構成する 9 つの要素力の育成をカリキュラムに反映させていることは評価できるが、一方で、人間力は要素力の全てを育成すれば高まるとは限らない。ある能力が優れていなくても別の能力が特に優れておれば、総合力としての人間力となることもあり得る。それは個々の学生の個性となる。大学全体での人間力育成と個々の学生の個性や特徴を活かした教育は別物かもしれない、IR を前者だけでなく後者にどのように役立てることができるかは今後の課題として問題提起したい。例えば、ある学生の学修成果について、IR によるデータ分析を経て要素分解されたひとつひとつを吟味した後に、それらを再び構築し直してみたところで、当該の学生像へそっくり戻ることはないであろう。それは集団としての学生イメージとて同じことがいえよう。IR による丁寧な分析は重要な活動である。ただ、その分析結果で学生や学生集団を語り尽くしてしまう怖さがあることは否めない。本委員会でテーマとなった「人間力の育成」についても、データを紐解きながら検証するには注意を払い、分析の陥穽に気をつけることが肝要である。貴学が人間力を育成できているのかについて分析をした詳細なデータで検討する「過程」を大切にされたい。

また、貴学が掲げ育成する「人間力」を IR 活動で得た結果と照合するのであれば、その段階について考慮しておくことが求められるであろう。育成のステップがカリキュラム（教育課程）だとすれば、そこには大きく三つのステップがある。1. 意図したカリキュラ

ム、2. 実施したカリキュラム、3. 達成したカリキュラムと呼ばれるものである。

学修成果の把握や検証は、「達成したカリキュラム」と関係するといえるだろう。IR 活動によって行われる議論の中心は、この「達成」と結びつく。この議論が「意図」に対してどれほど達成したかを論点としていけば良いものの、「〇〇力」の達成スコア比較に終始したり、「〇〇力」と「〇〇力」を総合的に考察できず全体像をつかめていなかったりすることで、論点が「意図」から離れていく事例は散見される。残念なことに「意図」そのものが、あやふやな場合もある。貴学における「人間力の育成」にあっては、各学部の3ポリシーを踏まえながら、「意図」「実施」「達成」が連動した検証・検討、改善を継続されたい。

貴学における「人間力」の構成要素については、建学の精神、大学の基本理念、共通教育基本理念、学部・学科の理念が示された。これに各学部・研究科の3ポリシーや学位プロフィールなどが紐付くが、この構造について整理・可視化しておくことは不要であろうか。理念といった類のものから、DP や AP、それらを育てる方法としての CP へと直に繋いでいく関係性、そこへ「学位プロフィール」が加わる構造など、やや複雑でもあり、窮屈な印象も持つ。また、全学の3ポリシー等が未策定であることは、貴学の判断であると理解するが、「理念」等の現代的な再解釈をすることなど、時代背景や社会状況との照合と修正を看過したまま IR 活動を継続する、つまり「意図」の再生をせずに検証を先走ったりすれば、その解釈を誤る可能性もある。そこに最大の注意が求められることを付言しておく。

最後に、今回のテーマである「人間力の育成」は、冒頭で背景を述べたように「高等教育」が対象であり、文部科学省の高等教育局が策定したものである。しかしながら教育目標とされる21世紀型市民は、大学生からの教育だけで達成できるものではなく、家庭教育から始まる切れ目のない連続した乳幼児・児童・生徒の教育が基盤となる。教育行政においては、文科省高等教育局と初等・中等教育局との連携なしには完成できないものだと考える。さらには、厚労省・内閣府・文科省と、乳幼児教育における保育所・認定こども園・幼稚園の分別。子供の成長は連続したものであるが、保育と教育に分けられ保教育という認識にならない現況。このようなわが国の現状にも目を向けて、改めて「人間力の育成」を考えて頂く良い契機になることを願うものである。

令和 7年 1月 31日

久留米大学外部評価委員会

委員長 瓦林 達比古

(一般社団法人福岡県社会保険医療協会 理事長、
福岡大学 名誉教授)

委員 田中 岳

(国立大学法人岡山大学 副学長、教学企画室 教授)

委員 松村 晶

(独立行政法人国立高等専門学校機構
久留米工業高等専門学校 校長)